

【シンポジウム／家庭医のやりがい】

女性家庭医のやりがいー仕事もプライベートもあきらめないー

西村真紀

川崎医療生協 あさお診療所所長

1. あさお診療所について

川崎市の北部、小田急線の新百合ヶ丘の駅から近い住宅地にある川崎医療生協の附属診療所です。常勤は所長の私と事務長、看護師2名のあわせてたったの4人。月間患者数は約870人というこじんまりとした診療所です。外来と訪問診療を行っています。

2. 家庭医になろうと思ったわけ

医学生の時、医療生協で実習を行ったことがきっかけで、健康な人も巻き込んだ地域住民中心の医療に大きな魅力を感じました。また藤沼医師（現日生協医療部会・家庭医療学開発センター長）に出会い、そのような医療を行う医師（今で言う家庭医）になるためにはそのためのトレーニングが必要だと知りました。大学5年の時にイギリスのGP（家庭医）の元で勉強して、私がめざすのはこれだ！家庭医だ！と確信しました。

3. medical homeのおかあさん

患者さんが入院するとき、私は「いってらっしゃい」と言います。患者さんの家族が入院中の様子を話しに來たり、退院した患者さんは「ただいま」と言って帰ってきてたくさん経験の話します。診療所は、患者さんとその家族にとって紹介とともに関係が絶たれるのではなく、いつでも（少なくともここからは）帰って來られる場所でありたいです。

また、他の大病院にかかっているけれど不安を

抱えている患者さんや、主治医に言いたいことが伝わらなくて困った患者さんが相談に來ることも多いです。「手術しなさいって言われてもどうしたらいいんだか分からなくて…やっぱり先生の顔が思い浮かんで…今日は來ました」と言ったAさん。このような患者さんにはセカンドオピニオンとして私の意見を言うこともありますし、病院の医師の言葉を翻訳してあげることもたびたびです。病院へのかかり方や、病院の先生への言いたいことの伝え方を具体的にアドバイスもします。Aさんは「なるほど、そういうことなんですね。先生もそう考えているんだったら、今度病院の先生に〇〇って言うてみます」と納得して病院にもう一度行く決心ができました。家庭医の行う医療は病院の医師との関係回復にも役立つことがあります。また、「大丈夫ですよ」と励ますと、Aさんは「大丈夫って言うてほしくてここへ來たんです」と言っていました。

このような経験から、家庭医療はMedical Homeの役割を持っているんだなと感じます。（Medical Homeという考え方は米國小児科学会が提唱している考え方です。）それは患者さんが何かあったときまず相談に來る、いつもよりどころとしている医療における「おうち」の役割です。Medical Homeは患者さんの生涯にわたり健康と病気に関わり、何かあったらまず相談できる場所です。その人の人生の最期においても真っ先に頼りにできる場所として機能します。患者さんに対して、大事な時に「Being there（あなたのそば

学術集会報告

にいる)」が家庭医です。ある医学生さんが見学に来ていて、「先生って街のおかあさんって感じですね」と言いました。なるほど、私はMedical Homeのお母さん役かもしれませんね。

4. 女性医師として

「女の先生だからちょっと聞いていいですか？」とお話しをする女性患者さんの訴えが時々あります。女性医師だったことがWomen's Healthの潜在的なニーズを気づかせてくれました。私は毎日の診療でWomen's Healthを意識して女性患者さんを診るようにしています。月経困難・尿失禁・萎縮性膣炎など、今まで訴えることのなかった患者さんが口を開くことが多いです。

また、女性特有のライフステージに目を向けて話をすると、病気だけでなく患者さんの背景が深く理解でき、患者さんの苦しみや医療への期待を発見することがあります。たとえば、高脂血症で通っている50歳のBさんに、医師は運動と食事の指導を毎回していますがコントロール不良のため薬の増量もやむを得ないと考えていました。女性の高脂血症について話をすると月経の話題になりました。実はBさんは月経が不順になっていて、3ヶ月来なかったり、最近では立て続けに1ヶ月に2度出血があったりしています。Bさんはとうとう更年期だ。とショックを受けていました。また最近一人息子が結婚して家を出て、食事を作る意欲が低下しており、さらに義母の介護をされていて運動療法は全くできないことが分かりました。このような女性ならではの家族の世話する役割や心理社会面を考慮すると、医学的指導が現実的でないことがわかります。その後、義母はデイサービスに行くようになり、その時間にBさんはプールに通うようになりました。医師は月経不順について子宮ガンを鑑別するため、子宮ガン検診を勧めました。

私は女性医師であったことがWomen's Healthに関わるようになったと述べましたが、これから

の時代は女性男性を問わずすべての家庭医に、婦人科的視点とは少し違うWomen's Health（疾患・予防・健康増進）を学んでもらいたいと思っています。

さて、私自身も女性であり結婚・妊娠・出産・子育てを経験しています。自分が地域で生活する人であることは患者さんの病や背景を理解する上で大変役立っています。人生すべての経験が家庭医としての糧になると感じています。子育て中、患者さんに迷惑をかけてしまうこともあります。子どもの病気で欠勤してしまった時に、患者さんに「先生もがんばってね」と声を掛けられるととても勇気づけられました。

5. 私、家庭医にむいてる？

研修医時代に藤沼先生が「西村さん、通販のカタログとか見るの好き？」と聞きました。「えっ、ものすごく好きです！」に対して、藤沼先生は「いいねえ、家庭医にむいてるよ。次から次へといろんなのがやってくるから、そういうのをうっとおしいじゃなく楽しいと思えるのが大事」と言いました。なるほど！です。

家庭医の仕事は、毎日新しい発見があります。病気が同じでも誰一人として同じ患者さんはいません。家庭医療学ではcontextual careというのですが、家庭医は一人一人違う患者さんに出会い、ともに病や健康を考え、その患者さん個人に合う医療を提供します。家庭医療は、患者さんと一緒に歩む時間の流れを感じることでできるやりがいのある仕事です。

毎日、仕事でもプライベートでも飽きない日々をおくっています。実習に来てくれる方が、「先生、ホント楽しそうですね」と言ってくれるのがとても励みになります。

患者さんに頼りにされる医療、私にとっても楽しくてたまらないそんな医療をこれからもやっていけたらと思います。